

2018/07/16 第65回東北社会学会大会 at 岩手県立大学

虐待の連鎖

眞田 英毅 (teruki.sanada.s8@dc.tohoku.ac.jp)

東北大学大学院文学研究科 人間科学専攻
行動科学専攻分野 修士課程2年

Outline of this talk

1. Introduction
2. 先行研究と仮説
3. データと手法
4. 結果
5. まとめと今後の課題

Outline of this talk

1. Introduction

2. 先行研究と仮説

3. データと手法

4. 結果

5. まとめと今後の課題

1. Introduction

- 子どもの虐待はいまなお、世間の注目を集めている

5歳死亡 両親逮捕

遺棄 致死容疑 食事与えず暴行

東京

東京都目黒区で船戸結愛ちゃん(5)を虐待したとして父親が傷害罪で起訴された事件で、警視庁捜査一課は6日、衰弱した結愛ちゃんを放置し、死亡させたとする保護責任者遺棄致死の疑いで、父親の船戸雄大容疑者(33)と目黒区と、母の優里容疑者(25)と同県を逮捕した。結愛ちゃんは1月下旬から、結愛ちゃんに十分な食事を与えず、暴行も加えるなどして衰弱させた上、虐待の疑いを深めた。

逮捕容疑は1月下旬から、結愛ちゃんに十分な食事を与えず、暴行も加えるなどして衰弱させた上、虐待の疑いを深めた。

結愛ちゃんが以前に住んでいた香川県普通寺市から1月に目黒区へ転居した後、自宅周辺で把握できた目撃情報は、転居した際に近隣の住民にあいさつした時の1回だけ。冬はベランダに出されたといひ、足の裏にはしもやけの痕が残っていた。転居後は食事が1日1食だったこともあった。

結愛ちゃんが以前に住んでいた香川県普通寺市から1月に目黒区へ転居した後、自宅周辺で把握できた目撃情報は、転居した際に近隣の住民にあいさつした時の1回だけ。冬はベランダに出されたといひ、足の裏にはしもやけの痕が残っていた。転居後は食事が1日1食だったこともあった。

待たの発覚を恐れて、医師の診察を受けさせずに放置。3月2日午後、肺炎による敗血症で死亡させた疑い。

捜査一課によると、5歳児の平均体重は約20kgだが、結愛ちゃんは死亡時約12kg。毎朝午前4時ごろに起き、体重測定とひらがなの書き取りをするよう命じられていた。自宅からは謝罪の言葉を何日間も書いた大学ノートが見つかった。

虐待の現状 認識深める

大崎でシンポジウム

第10回虐待防止・県北シンポジウム(実行委主催)が23日、大崎市の古川保健福祉プラザで開かれた。子どもの貧困と虐待防止をテーマに行政や医療関係者ら約100人が集まり、パネル討論などを通じて現状認識を深めた。

討論には行政関係者や学習支援のNPO、弁護士らが参加。県北部児童相談所(大崎市)の福田宏子所長は、管内の昨年度の児童虐待対応件数は16件と過去最高だったことを報告。「約25%がひとり親の家庭だったが、虐待する親の生い立ちや心身状況などが絡み合って虐待が起きると感じる」と話した。

栗原市子育て支援課の菅原由美課長は「生活保護受給世帯で全員が高校に進む一方、虐待の未然防止の支援が必要な世帯では進捗状況認識を深めたシンポジウム」

虐待の現状 認識深める

大崎でシンポジウム

第10回虐待防止・県北シンポジウム(実行委主催)が23日、大崎市の古川保健福祉プラザで開かれた。子どもの貧困と虐待防止をテーマに行政や医療関係者ら約100人が集まり、パネル討論などを通じて現状認識を深めた。

討論には行政関係者や学習支援のNPO、弁護士らが参加。県北部児童相談所(大崎市)の福田宏子所長は、管内の昨年度の児童虐待対応件数は16件と過去最高だったことを報告。「約25%がひとり親の家庭だったが、虐待する親の生い立ちや心身状況などが絡み合って虐待が起きると感じる」と話した。

栗原市子育て支援課の菅原由美課長は「生活保護受給世帯で全員が高校に進む一方、虐待の未然防止の支援が必要な世帯では進捗状況認識を深めたシンポジウム」

出典

河北新報

右：18/06/07

左：17/11/24

1. Introduction

- 児童虐待の認知件数は右肩上がり

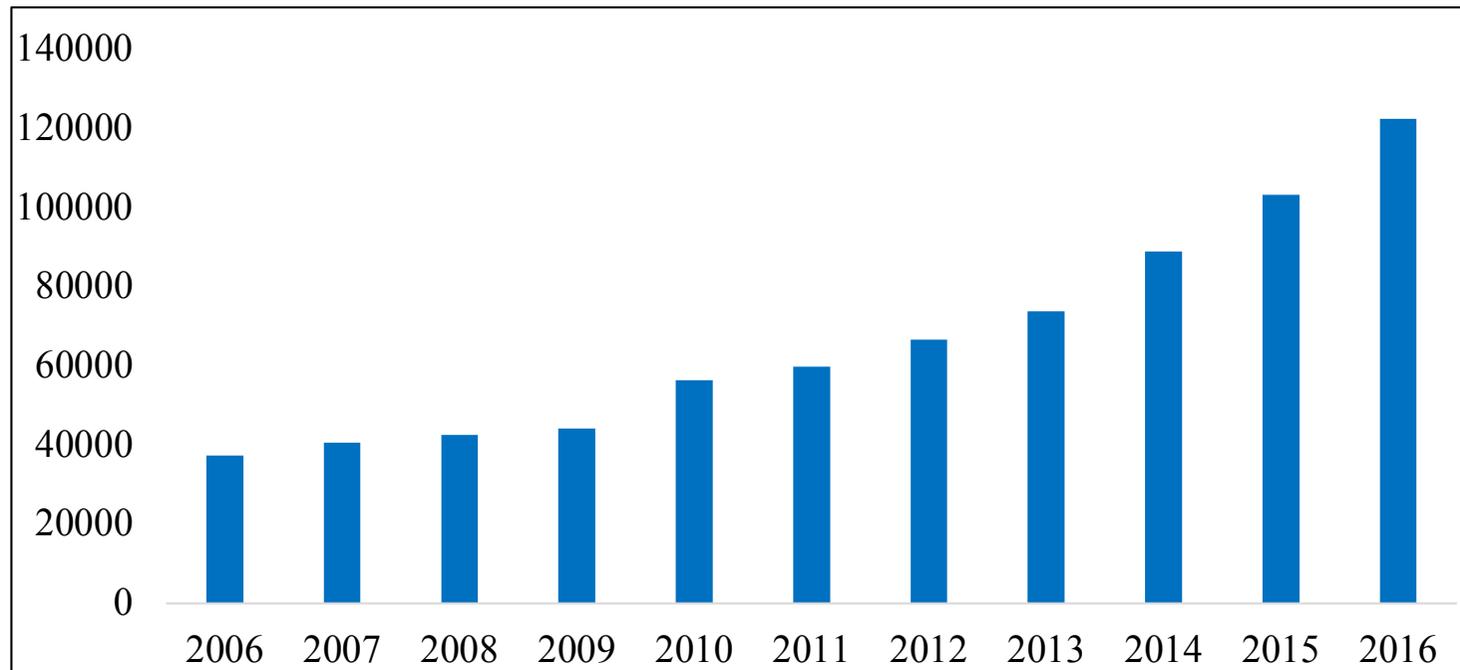


図1：児童虐待の認知件数
出典：厚生労働省(2017)より作成

- なぜ児童への虐待件数は減らないのだろうか

Outline of this talk

1. Introduction
- 2. 先行研究の限界と仮説**
3. 仮説の検証
4. データと手法
5. 結果
6. まとめと今後の課題

2. 先行研究

児童虐待の定義（厚生労働省HPより）

身体的虐待：殴る、蹴る、投げ落とす、など

性的虐待：子どもへの性的行為など

ネグレクト：家に閉じ込める、食事を与えない、
ひどく不潔にする、など

心理的虐待：言葉による脅し、無視、きょうだい
間での差別的扱い、DVなど

本研究は身体的虐待に着目

（暴力を振るわれるという明確な基準があるため）

2. 先行研究

しつけという名の虐待

吉川(2000)や新家ら(2004)

- ・ 母親たちに実際の子育て行動がしつけか虐待かを尋ねる
- ・ 多くの親が「殴る・蹴る」は虐待であると認識するも「叩く」などの行為は虐待とみなさない

金谷・杉浦(2006)

- ・ ほとんどの母親(96.6%)はダメージの少ない身体の部位に体罰を伴うしつけを行う

2. 先行研究

しつけという名の虐待

李・津村(2014)

- ・ 父親におけるしつけと体罰に注目
- ・ 父親の認識が曖昧な行為が少なからずあり、しつけと体罰の境界が個人の裁量によって決まっている

→ 軽い暴力は**家庭内で日常的**に行われており、**多少の暴力はしつけ**とみなされる風潮は多く残っている(加納 2014)

2. 先行研究

虐待の世代間連鎖

Kaufman and Zinger (1993)

- ・ 子どもの虐待の世代間連鎖は30%程度
→ 西澤 (1994) によればこの傾向は日本でも確認できる

岩井 (2003, 2010)

- ・ JGSS-2000/2001, JGSS-2008を用いて
「親による体罰容認意識」を分析

2. 先行研究

虐待の世代間連鎖

岩井(2003, 2010)

- JGSS-2000/2001

暴力を受けた経験が、親や教師の体罰を容認しやすくするのか重回帰分析で検証

→暴力を受けた子どもは体罰を容認する

- JGSS-2008

JGSS-2000/2001と同様に、体罰容認意識に関する規定要因を検討

→性別、子ども期の被暴力経験、自民党支持などが効果をもつ

2. 先行研究の限界

虐待の世代間連鎖

- 先行研究の多くはしつけと体罰の境界や、どのような体罰を行っているかを調査
 - 世代間連鎖を検討した岩井(2003, 2008)は示唆に富むものの、男女における暴行経験の受けやすさ(細坂・茅島 2017; Stein et al. 2013)や、世代における体罰への意識の違いを十分に考慮したとはいえない
- 本研究は、岩井(2003, 2010)の研究をもとに、日本における虐待の世代間連鎖の詳細を検討

2. 仮説

社会学習理論

Bandura (1977=1979)

直接的な刺激を加えずとも他者の行為を観察し模倣することによっても学習は成立

→親から虐待された子どもは虐待する方法を学び (Winton and Mara 2001=2002), 自らの子育てでも暴力で問題を解決する

仮説1：暴行経験がある人は体罰に賛成しやすい

2. 仮説

虐待の世代間連鎖

広田(2001)

- ・ 戦前はある程度の物理的な暴力は許容
- ・ 言葉だけでは教育できない

**仮説2：年齢があがれば体罰に賛成しやすくなり、
体罰経験のある人はより賛成しやすくなる**

Outline of this talk

1. Introduction
2. 先行研究と仮説
- 3. データと手法**
4. 議論
5. 結果
6. まとめと今後の課題

3. データと手法

データ

JGSS-2008

「第7回生活と意識についての国際比較調査」

抽出法：層化二段無作為抽出法

対象：2008年8月31日時点で満20歳以上
89歳以上の全国の男女を対象

[Acknowledgement]

日本版General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学JGSS研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、東京大学社会科学研究所の協力を受けて実施している研究プロジェクトである。

3. データと手法

手法

順序ロジスティック分析

- 岩井(2003, 2010)を参考にモデルや変数を作成
- 男女における体罰の受けやすさの違いや、虐待者の性別は60%以上が女性である(李・津村 2014)ことを考慮し、**男女別**に分析を行う

※分析にはR(3.5.0), MASSパッケージを使用

3. データと手法

従属変数

- ・ 体罰に関する意識

Q62 『「親による体罰は、時により必要である」という意見に、あなたは賛成ですか、反対ですか。』

→ 「5. 賛成」～「1. 反対」の5段階尺度(反転)

3. データと手法

主な独立変数(世代間連鎖を検討する変数)

- 大人から暴力を受けた経験

Q19-1 「あなたは、子どもの時に、殴られたり、
暴行をうけたりした経験がありますか。」

→ 「はい」

Q19-2 「それは誰からですか」

→ 親か先生のどちらかを選択：1

その他：0

3. データと手法

独立変数一覧

- 性別
- 年齢(コホート)
- 教育年数
- 大人から暴力を受けた経験
- 15歳時の世帯収入
- 親の教育年数(高い方を採用)
- 親のしつけの厳しさ(5.厳しい～1.やさしい)
- 保守政党(自民・公明)支持ダミー
- 子どもの教育責任(5.家庭～1.国・自治体)
- 主観的幸福感
- 政治的思考(5.保守～1.革新)

Outline of this talk

1. Introduction
2. 先行研究と仮説
3. データと手法
- 4. 結果**
5. 今後の課題

4. 2変数の関連

暴行経験の有無による体罰意識の違いを検討

表1 体罰容認意識の平均

| | | <i>N</i> | 平均値 | 標準偏差 |
|----|---------|-----------|------|------|
| 男性 | 暴行経験あり | 245 | 3.87 | 1.07 |
| | 暴行経験なし | 513 | 4.22 | 0.92 |
| | 合計 | 758 | 3.98 | 1.04 |
| | Welch t | -4.71 *** | | |
| 女性 | 暴行経験あり | 111 | 3.60 | 1.17 |
| | 暴行経験なし | 663 | 3.52 | 1.05 |
| | 合計 | 774 | 3.53 | 1.07 |
| | Welch t | -0.73 | | |

男性では暴行経験がない方が体罰に賛成している

4. 順序ロジットの結果 (男性)

| | モデル1 | | モデル2 | | モデル3 | |
|-------------------------------|----------|------|----------|------|---------|------|
| | B | S.E. | B | S.E. | B | S.E. |
| 1918-39年生まれ (ref 1971-88年生まれ) | -0.05 | 0.25 | -0.19 | 0.25 | -0.12 | 0.29 |
| 1940-54年生まれ (ref 1971-88年生まれ) | -0.28 | 0.21 | -0.34 | 0.21 | -0.25 | 0.25 |
| 1955-70年生まれ (ref 1971-88年生まれ) | -0.22 | 0.20 | -0.27 | 0.21 | -0.29 | 0.25 |
| 教育年数 | -0.02 | 0.03 | -0.01 | 0.03 | -0.01 | 0.03 |
| 世帯収入 | 0.04 | 0.08 | 0.00 | 0.09 | -0.08 | 0.09 |
| 大人からの暴力経験 | 0.70 *** | 0.15 | 0.72 *** | 0.15 | 0.83 ** | 0.33 |
| 15歳時の世帯収入 | -0.15 | 0.08 | -0.15 | 0.08 | -0.15 | 0.08 |
| 親の教育年数 | 0.00 | 0.03 | 0.00 | 0.03 | 0.00 | 0.03 |
| 親のしつけの厳しさ | | | 0.14 | 0.11 | 0.14 | 0.11 |
| 保守政党支持ダミー | | | 0.37 * | 0.17 | 0.37 * | 0.17 |
| 子どもの教育責任に対する考え | | | 0.04 | 0.05 | 0.05 | 0.05 |
| 主観的幸福感 | | | -0.01 | 0.07 | -0.01 | 0.07 |
| 政治的考え | | | 0.06 | 0.08 | 0.06 | 0.08 |
| 1918-39年生まれ*暴力経験 | | | | | 0.06 | 0.43 |
| 1940-54年生まれ*暴力経験 | | | | | -0.26 | 0.41 |
| 1955-70年生まれ*暴力経験 | | | | | -0.20 | 0.49 |
| AIC | 1952.19 | | 1952.34 | | 1957.46 | |
| BIC | 2007.72 | | 2031.02 | | 2050.03 | |
| Log Likelihood | -969.09 | | -959.17 | | -958.73 | |
| Deviance | 1928.19 | | 1918.34 | | 1917.46 | |

4. 順序ロジットの結果（男性）

- 男性では、大人からの暴力経験に関して有意な効果が見られた
 - この効果は統制変数を増やしたモデル2, 3でも変わらない
- 保守的な政党を支持している人は、支持していない人よりも体罰に賛成しやすい

4. 順序ロジットの結果（女性）

| | モデル1 | | モデル2 | | モデル3 | |
|------------------------------|----------|------|----------|------|----------|------|
| | B | S.E. | B | S.E. | B | S.E. |
| 1918-39年生まれ（ref 1971-88年生まれ） | 0.35 | 0.18 | 0.41 | 0.18 | 0.40 | 0.26 |
| 1940-54年生まれ（ref 1971-88年生まれ） | -0.04 | 0.20 | -0.06 | 0.20 | -0.11 | 0.21 |
| 1955-70年生まれ（ref 1971-88年生まれ） | -0.10 | 0.24 | -0.10 | 0.25 | -0.03 | 0.20 |
| 教育年数 | -0.06 | 0.04 | -0.04 | 0.04 | -0.04 | 0.04 |
| 世帯収入 | 0.06 | 0.09 | 0.09 | 0.09 | 0.09 | 0.09 |
| 大人からの暴力経験 | 0.41 * | 0.20 | 0.36 | 0.20 | 0.38 | 0.36 |
| 15歳時の世帯収入 | -0.03 | 0.08 | -0.03 | 0.08 | -0.03 | 0.08 |
| 親の教育年数 | -0.01 | 0.03 | -0.01 | 0.03 | -0.01 | 0.03 |
| 親のしつけの厳しさ | | | -0.07 | 0.12 | -0.06 | 0.12 |
| 保守政党支持ダミー | | | 0.09 | 0.16 | 0.08 | 0.16 |
| 子どもの教育責任に対する考え | | | 0.16 ** | 0.06 | 0.16 ** | 0.06 |
| 主観的幸福感 | | | -0.21 ** | 0.08 | -0.20 ** | 0.08 |
| 政治的考え | | | -0.11 | 0.09 | -0.11 | 0.09 |
| 1918-39年生まれ*暴力経験 | | | | | -0.38 | 0.48 |
| 1940-54年生まれ*暴力経験 | | | | | 0.60 | 0.56 |
| 1955-70年生まれ*暴力経験 | | | | | 0.22 | 0.96 |
| AIC | 2178.31 | | 2172.45 | | 2174.92 | |
| BIC | 2234.08 | | 2251.46 | | 2267.88 | |
| Log Likelihood | -1077.16 | | -1069.22 | | -1067.46 | |
| Deviance | 2154.31 | | 2138.45 | | 2134.92 | |

4. 順序ロジットの結果（女性）

- 女性では，大人からの暴力経験に関して有意な効果は**モデル1でのみ**確認できた
- **子どもの教育責任が家族にあると考えるほど，主観的幸福感が低いほど，体罰に賛成しやすい**
- 年齢と大人からの暴力経験の交互作用項も有意な結果は確認できなかった

Outline of this talk

1. Introduction
2. 先行研究と仮説
3. データと手法
4. 結果
- 5. まとめと今後の課題**

5. まとめ

- 男性では、世代間連鎖が全てのモデルを通して確認できたが、女性では一部のみ確認できた

→ **仮説1は一部支持**

男性は子どもの頃から“男の子らしい”ことを求められる(細坂・茅島 2017)

そのため体罰を受けやすく (Stein et al. 2013),
それが影響している可能性

5. まとめ

- 他方，虐待者の多くは女性である(李・津村 2014)
 - 女性は子どもと関わる時間が多く(総務省 2017)，
ストレスなどから幸福度が下がれば子どもに
あたりやすいことが考えられる
 - 男性は体罰に賛成していてもそもそも家事・
育児参加時間が短いためそのような意識を
行動に移しにくい

5. まとめ

- 年齢と体罰経験は男女ともに有意ではない
 - **仮説2は不支持**
(コーホートの基準カテゴリーを老年層に変えると若干効果あり)
- 男性では、保守的な政党の支持をする人は体罰に賛成しやすかった
 - この結果は岩井(2003)と整合的であるが、他方、政治的考えに関しては有意な結果が得られなかった

5. 今後の課題

1. 定義が曖昧
虐待なのか暴力なのか体罰なのか
2. 夫婦間の意識の相互作用
 - ・ 同様な意識を持つ者同士が結婚しやすい
 - ・ 結婚後に配偶者の意識に影響を受けて自分の意識が変化するのではないか
3. 虐待の世代間連鎖は2割強
→ 世代間連鎖から外れている人はどういう人か
 - ・ 虐待を受けていないが体罰賛成派
 - ・ 虐待を受けたが体罰反対派

引用文献①

- Bandura, Albert, 1977, “Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change,” *Psychological Review*, 84(2): 191-215. (=1979, 原野広太郎, 『社会学習理論—人間理解と教育の基礎—』金子書房.)
- 広田照幸, 2001, 『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会.
- 細坂泰子・茅島江子, 2017, 「乳幼児を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相」『日本看護科学会誌』37: 1-9.
- 岩井八郎, 2003, 「経験の連鎖—JGSS-2000/2001による『体罰』に対する意識の分析—」『日本版 General Social Surveys 研究論文集』2: 113-125.
- 岩井八郎, 2010, 「容認される『親による体罰』—JGSS-2008による『体罰』に対する意識の分析—」『日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集』10: 49-59.
- Kaufman, Joan & Zigler Edward, 1993, “Do abused children become abusive parents,” *American Journal of Orthopsychiatry*, 57(2): 186-192.
- 金谷光子・杉浦恵子, 2006, 「しつけと虐待の狭間 子育て講座に参加した母親へのアンケート調査を通して」『母性衛生』47(1): 32-42.
- Lee, Yanghee & Kim Sangwon, 2011, “Childhood maltreatment in South Korea: Retrospective study”, *Child Abuse & Neglect.*, 35(12): 1037–1044.
- 李璟媛・津村美穂, 2014, 「未就学児の父親におけるしつけと虐待に関する認識と経験—2000年と2010年の2つの調査に基づいて—」『比較家族史研究』28: 88-118.

引用文献②

西澤啓, 1994, 『子どもへの心理的影響』 誠信書房.

新家一輝・篠原裕子・藤田三樹・津田朗子・西村真実子・関秀俊, 2004, 「児童虐待の認識に関連する要因—多重ロジスティック回帰分析による検討」『小児保健研究』 63(4): 436-441.

Stein Alan, Malmberg Lars Eric, Leach Prescott, Barnes Jennifer, Sylva Kathy & the FCCC team, 2013, “The influence of different forms of early childcare on children’s emotional and behavioural development at school entry”, *Child: Care, Health and Development*, 39(5): 676–687.

総務省統計局, 2017, 「平成28年社会生活基本調査—生活時間に関する結果—」 (2018年1月30日取得<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf>) .

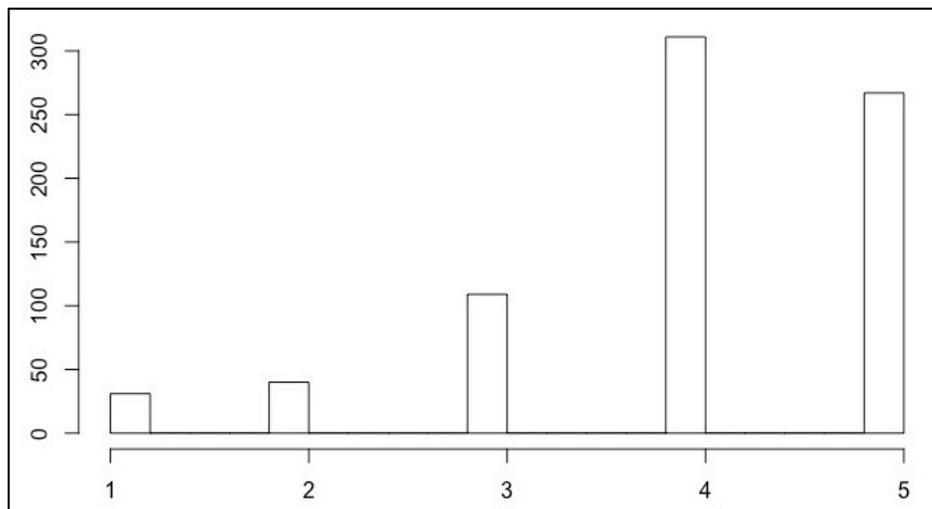
Winton Mark A. & Barbara A. Mara, 2001, *Child Abuse and Neglect: Multidisciplinary Approaches*, Pearson (=2002, 岩崎浩三訳, 『児童虐待とネグレクト』 筒井書房) .

Appendix

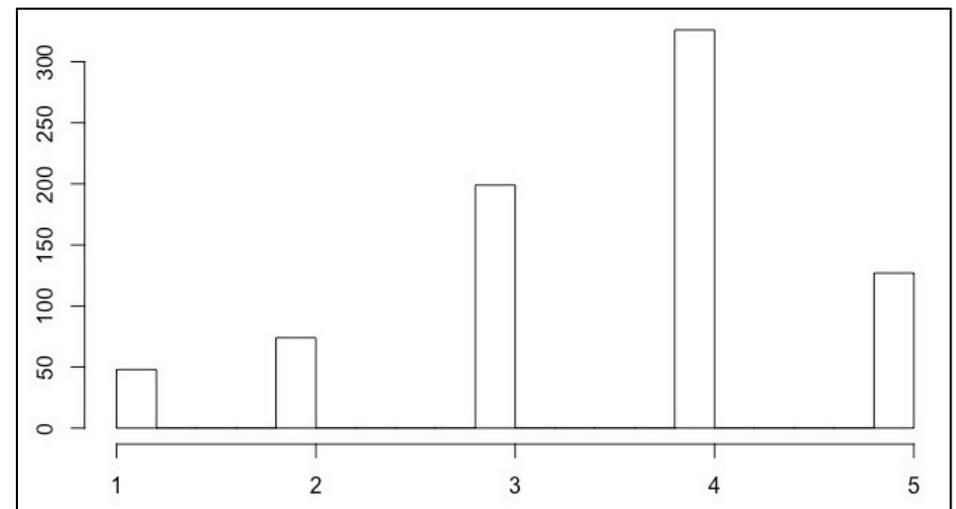
記述統計量(従属変数)

付表1 従属変数の記述統計量

| | 最小値 | 最大値 | 平均 | 標準偏差 |
|----|------|------|------|------|
| 男性 | 1.00 | 5.00 | 3.98 | 1.04 |
| 女性 | 1.00 | 5.00 | 3.53 | 1.07 |



付図1：体罰意識の分布(男性)



付図2：体罰意識の分布(女性)

Appendix

記述統計量(独立変数：連続)

付表2 連続変数の記述統計量

| | | 最小値 | 最大値 | 平均値 | 標準偏差 |
|----|----------------|-----|-----|-------|------|
| 男性 | 教育年数 | 6 | 18 | 13.15 | 2.62 |
| | 世帯収入 | 1 | 5 | 2.66 | 0.88 |
| | 15歳時の世帯収入 | 1 | 5 | 3.25 | 0.93 |
| | 親の教育年数 | 6 | 16 | 10.49 | 3.38 |
| | 親のしつけの厳しさ | 1 | 4 | 2.76 | 0.63 |
| | 子どもの教育責任に対する考え | 1 | 5 | 3.20 | 1.30 |
| | 主観的幸福感 | 1 | 5 | 3.90 | 0.97 |
| | 政治的考え | 1 | 5 | 3.00 | 0.98 |
| 女性 | 教育年数 | 6 | 18 | 12.57 | 2.19 |
| | 世帯収入 | 1 | 5 | 2.69 | 0.83 |
| | 15歳時の世帯収入 | 1 | 5 | 3.14 | 0.89 |
| | 親の教育年数 | 6 | 16 | 10.67 | 3.18 |
| | 親のしつけの厳しさ | 1 | 4 | 2.82 | 0.58 |
| | 子どもの教育責任に対する考え | 1 | 5 | 3.24 | 1.23 |
| | 主観的幸福感 | 1 | 5 | 4.00 | 0.90 |
| | 政治的考え | 1 | 5 | 3.09 | 0.75 |

Appendix

記述統計量(独立変数：カテゴリー)

付表3 カテゴリー変数の記述統計量

| | 男性 | | 女性 | |
|-------------|-----|--------|-----|--------|
| | 度数 | % | 度数 | % |
| 1918-39年生まれ | 158 | 20.84 | 197 | 25.45 |
| 1940-54年生まれ | 205 | 27.04 | 233 | 30.10 |
| 1955-70年生まれ | 267 | 35.22 | 207 | 26.74 |
| 1971-88年生まれ | 128 | 16.89 | 137 | 17.70 |
| 大人からの暴力経験あり | 245 | 32.32 | 111 | 14.34 |
| 大人からの暴力経験なし | 513 | 67.68 | 663 | 85.66 |
| 保守政党支持 | 207 | 27.31 | 199 | 25.71 |
| 保守政党不支持 | 551 | 72.69 | 575 | 74.29 |
| 合計 | 758 | 100.00 | 774 | 100.00 |